

連載長編小説

3 朝比奈あすか

少女は花の肌をむく

14 木村紅美

まっぷたつの先生

28 長嶋 有

三の隣は五号室

42 山下澄人

壁抜けの谷

連作短編小説

56 松田青子

おばちゃんたちのいるところ

Where the Wild Ladies Are

アンデル

小さな文芸誌

1 January
2015
no.1

CONTENTS

連載マンガ

66 斉藤弥世

左右石先生と書生

GALLERY &L 写真

2, 12, 27, 伊原美代子
39, 52, 68 海女

68 作者紹介

69 中央公論新社の文芸書

72 編んでる人が考える
定期購読のご案内

表紙画／デュフォ恭子

「a panda in the red room」



ははつきり言ったのだった。——モデル体型じゃない。

阿佐は「なんでえ〜」と中途半端に語尾をのぼすことで泣きたしそうになる自分を守ったが、その頃すでに、鏡を見るたびそこにある、細くつりあがった目や、起伏にとぼしい鼻のかたち、かすかな痛みを憶えていた。可愛い可愛いと言つてくれる母親の言葉が、世間の基準とは完璧に重なっているわけではないということにも気づき始めていた。だけど、まだ、体型を気にかけてはなかった。

三学期にもなると早川唯は運動神経のよい松本晴菜に夢中になって、一緒に踊りたがった。早川唯は阿佐と晴菜を比べて、うまくステップを踏めない阿佐をなじった。

「なんでできないの？」「阿佐、変」「やり直して」

笑いながら言うものだから、阿佐も笑ってやり直さなければならなかった。何度も何度も。阿佐も、週に一回ダンススクールに通っていたけれど、早川唯や松本晴菜ほど上手には踊れなかった。

始業式の始まりを知らせるチャイムが鳴った。

「あ！ 校長先生だ。じゃーねー」

早川唯が松本晴菜をひっぱるようにして、阿佐の前から去った。

すでに校長先生が朝礼台に立っている。

校長先生は朝礼台にじっと立って、黙って校庭を見回し、皆が気づいて自分たちで並ぶのを待っているのだ。毎回そう

して皆を並ばせ、「今回は○秒かかりました」と言ってから式を始めるのがパターンだということを、高学年の子たちは知っているから、そそくさと列を作るけれど、低学年の子はまだ気づかない。

「のんのん。一緒に並ぼう」

阿佐はそう言つて、野々花の腕に自分の腕をぎゅうとからめた。

新しいクラスの時は、「来た順」に並ぶのだと、五年生の子たちは知っている。三年生の最初の始業式がそうだったから。まだ正確な背の順が分からないし、名前を知らない子もいるから。

ふたりは前後に並ぶ。阿佐が前で野々花が後ろ。

「わあ！」

急に野々花が大きな声をあげた。

「のんのん、どうしたの」

阿佐が言うと、

「阿佐の頭からいいにおいがするっ」

野々花が花のような笑顔で言った。おまけに野々花は、阿佐の頭にさらに鼻をおしあてて、くんくん嗅いでくる。

阿佐は頬を赤くして、

「やだあ、のんのん、きもーい」

言いながら、苦しくなるくらいのように包まれた。

のんのん大好き。唯ちゃんなんかより、ずっと好き。ずっと